

# SDGsにおける文化の位置付け：阿蘇地方を 事例に

ヴィルヘルム ヨハネス<sup>1</sup>

<sup>1</sup>熊本大学 熊本創生推進機構 特定事業教員

## 1. はじめに

SDGsとは、英語のSustainable Development Goalsの頭文字をなぞったものであり、日本語に訳せば「持続可能な開発目標」を意味するが、正確には2015年の国連総会で採択された文書「Agenda2030」(The 2030 Agenda for Sustainable Development)において2000年の総会で採択された「MDGs」(Millennium Development Goals)の次のステップとして策定された行動方針である。

SDGsは17の目標から構成なり、合計169の小目標によって具体化されている。169の小目標は107の実質的な目標と62の実施手段に分けることができ、主に財政的または制度的な仕組みを記述している。

写真-1 SDGsの日本語訳ロゴ



出典：[https://www.unic.or.jp/files/sdg\\_poster\\_ja.pdf](https://www.unic.or.jp/files/sdg_poster_ja.pdf)

これらの目標と小目標に関する内容を詳細にコメントするのは避けたいため、

UNDP（国連開発計画）のホームページなどを参考にしたい。

(<https://www.jp.undp.org/>) しかしながら、本文のテーマで肝心の「文化」は主要な目標から省かれている。その理由としてはいくつか考えられるが、文化という用語の意味づけにおける曖昧さも妨げとなっていた可能性が考えられる。即ち、文化とは様々な解釈が考えられるため、より詳細で具体的な形での記載が優先されたことである。

では、17+169の大小目標に文化と関わる項目が見られるかというと、17の目標にはそれぞれ文化の領域と密接に繋がっている他、小目標においても地域における伝統的な知識なども見られる。これらは様々な団体や組織からも指摘されており、本文の執筆においても参考にした。（文献Culture21, British Council）

本文は阿蘇地域の文化を実例に、SDGsの在り方や構築について考察する。この考察は、著者が阿蘇における三年に及ぶ長期調査滞在（環境研究総合推進費SⅡ-5「阿蘇をモデル地域とした地域循環共生圏の構築と創造的復興に関する研究」2019-2021）を通してコモンズと社会資本の関係を対象に得られた観察をベースとしており、実際に見られた現状・現象を主体的な感情や考えと交えてみたものである。

文書の構成は、最初に国際的なSDGsを取り巻く舞台（議論）で文化の価値を如何に評価したかを解説する。それに続き、対象地である阿蘇地域の社会と自然の概略を行い、後半では、著者が阿蘇地域における生活の中で上記の点を考察する。その中で、コロナ禍の影響についても若干触れておく。最後に阿蘇地域におけるSDGsの構築における文化的要素の可能性を描いてみたい。

## 2. SDGsにおける文化の位置付け

SDGsが形成する17の目標には文化という用語は存在しない、が、169の小目標を見ていくと地域の文化と深く繋がっている点が多数存在する。世界でSDGsにおける文化の位置付けを対象としている本章の作成ではParodi et al. (2011)、Wiktor-Mach (2018)、UCLG Committee of Culture (2018)、及び、British Council (2020)を参考文献として使った。

まず、初期に最も基礎的な構図を描かれたのがParodi et al. (2011)が編集した単行本である。この書物は文化や持続性の定義と関係性（Kopfmüller 2011）等といった様々な専門家による基礎研究を集めたものであると同時に、ある意味でSDGsの制定過程で必要となる前提的な条件を考察し、持続的な発展が可能な社会における文化の領域を囲った。それらを基にSDGs制定後に同領域に関わる政策的側面を追求したのがWiktor-Mach (2018)であり、彼女は2018年までの研究を振り返りながら特に発展概念における文化の位置付けと、SDGsの制定において文化が（特にUNESCOを中心に）如何に扱われてきたかの概略を提供した。次に、UCLG Committee of Culture (2018)は前者が描いた文化を取り巻くSDGs構想の実現マニュアルという一般書物としてインターネットを通して提供した。次のBritish Council (2020)は、その内容がややプログラムの的であり、ある意味では、SDGsを達成する上で文化的側面にもっと注意を払うことを求めている。

SDGsにおける17の目標には文化は一切見られないものの、それぞれと密接な関係を持っている。制定された2015年以降からは169の小目標の一部と密接な関わりを挙げる意見も存在する。UCLG Committee of Culture (2018)では17項目においてそれぞれに於いて文化との関係が解説されており、より関連する小目標を示している。これらを全て本文では扱えないため、2番目と16番目の目標、即ち「飢餓を終わらせ、食料安全保障及び栄養改善を実現し、持続可能な農業を促進する」、略して「飢餓をゼロに」、を例として試みる。

目標2には小目標2.5「2020年までに、国、地域及び国際レベルで適正に管理及び多様化された種子・植物バンクなども通じて、種子、栽培植物、飼育・家畜化された動物及びこれらの近縁野生種の遺伝的多様性を維持し、国際的合意に基づき、遺伝資源及びこれに関連する伝統的な知識へのアクセス及びその利用から生じる利益の公正かつ衡平な配分を促進する」が挙げられている。ここで挙げられている「伝統的な知識」は明らかに文化の一部であり、種子、栽培植物、飼育・家畜物などと生活を支える全ての生き物を含むため、地元の文化と深く関わりを示している。また、明言化されていないものの、伝統的な知識は目標14と15においても重要である。即ち、「持続可能な開発のために海洋・海洋資源を保全し、持続可能な形で利用する」、略して「海の豊かさを守ろう」、と「陸域生態系の保護、回復、持続可能な利用の推進、持続可能な森林の経営、砂漠化への対処、ならびに土地の劣化の阻止・回復及び生物多様性の損失を阻止する」、略して「陸の豊かさを守ろう」、にも大いに当てはまると言える。

一方で、SDGsにて文化を位置付ける場合、「持続性」と「文化」という二つの中核的な用語の定義が大変困難であり、それぞれには多面的で多彩な側面がある。また、これらの用語が互いに関連して配置されたとき、それぞれの意味をシフトさせる相互依存性が現れる。(Hauser and Banse 2011) それを表す簡単な例を挙げよう。とある場所の採取現住民族集団が代々自然と共存し、自然が提供する資源をリスペクトしつつ活用していたとする。そこに、自然資源の略奪を文化を支える経済的な基礎に置く産業的発展を終えた文化圏の医師が現れて、難病の治療に当たった。この行為を通して、現住民族集団は産業発展の利点を発見し、発展への道を選び、自然との共存関係を失う。結果として、多様な自然との共存関係を中核に置いた原住民文化が発展への道を選んだことによって自然との共存から略奪への道を進むことになる。また、この例で分かる重要な点はもう一つある。それは、「持続性」と「文化」それぞれが置かれている時空的空間的な位置、即ち、セッティングという囲う条件である。結果として、統一された定義は困難であり、逆に、多様性を起点に置いた考え方が妥当であると思われる。つまり、文化も持続性も多彩であり、それぞれのケースによっての対応、考え方があり得る。

しかし、だからと言って何でもありという訳には行かない。ジレンマを政策面で解消するにはどうすれば良いのであろうか。その答えは恐らく、政策の策定面にある。合理主義を進める政策なら「持続性」と「文化」は統合できないとしてアプローチを破棄するであろう。これは特に官僚体制を中心に置いた政策執行文化においては多彩なケースを監督する行政官が無制限に必要となるため無理な話しである。しかしながら、

統一された政策の基礎に「多様性」を置いたら話しは別である。つまり、行政による監督が大まかな範囲で関わり、現場は地元任せという手段である。この場合、多様性も維持できる他、現地における自治力の強化も図れる。無論、自治力と結集力がある地元は災害であろうとその他の問題であろうと解決に向けた議論が可能となる。

ここで簡単に描いてみた考えは結論的に文化を持続的発展のツールとして捉えるものである。その理由は、文化にある結束力にある。文化は集団にいる一人一人が互いに共有する価値的な資源であり、同時に多様であるため相互差の「理解」を通して寛容な社会状態を生み出す。その意味で、文化とは建造物に例えたら支える柱、自動車のエンジンに例えれば様々な歯車の動きを柔軟にするオイルに当たる。

次に、阿蘇における住民の日常生活に於いて観察したSDGsと文化に関わる具体的な例を紹介する。

### 3. 阿蘇地域におけるSDGsと文化に関わる事例

広大な草原景観と巨大なカルデラ火山から形成される阿蘇地域の認知度は高いと言えよう。九州を代表する観光地でもあるのがそれを証拠付けていると言えよう。阿蘇にまつわる文化の目玉の一つが阿蘇神社などで毎年行われているお祭りや行事である。

#### (1) 阿蘇の流鏝馬有志

9月下旬に行われている田実祭（たのみさい）とその一部である流鏝馬はもまた、神社の代表的な行事である。現在の流鏝馬は地元にある阿蘇農業高校の乗馬部に属していたOBメンバーの男性たちからなる。残暑の時期になると有志集団は毎週決められた日（主に土曜日）の日没頃から神社の敷地に集まり、本番に向けて流鏝馬の練習に取り掛かる。（写真-2、3）

写真-2 流鏝馬の練習会



出典：2019年9月11日阿蘇市阿蘇神社にて著者撮影

最初の数回は簡単な練習で弓矢の姿勢を磨いていき、徐々に練習の難易度が上がっていく。本番前になると軽トラックに馬の背に似せた台を取り付けてそれに「乗馬」

し、神社敷地外の参道を猛スピードで軽トラックが突っ走り、的を狙っていく。（写真）練習の後はメンバーの何人かが近くの飲み屋に向かい打ち上げを行う。毎回冗談が飛び舞って大変盛り上がる寄り会だ。本番の前日になると、有志全員が参加する会が飲み屋で行われ、そこで大量の酒を呑みながら結集の確認と絆を深める。本番当日になると、前夜の酒が残っている選手も居れば、顔色が悪い人もおり、酔いがエスカレートして目付きが歪んでいる有志もいるが、流鏝馬の本気度が目に見える真剣さである。興味深いことに、流鏝馬を見に来る観客のほとんどは地元の住民や有志の親戚などであり、観光客はごく稀にしか目にしない。観光客やアマチュアカメラマンが大勢同神社に集まる7月下旬の御田植神幸式（通称：おんだ祭り）と全く異なる。

### 写真-3 田実祭の流鏝馬



出典：2019年9月25日阿蘇市阿蘇神社にて著者撮影

流鏝馬有志のY君は集団のリーダーであり、その先輩であるK君は仲がいい飲み仲間あると共に、このアラフォー二人は毎年優勝を競い合うライバルでもある。K君は地元生まれであるものの、学校を卒業した後、一旦都会で建設業で仕事をしてきたが、やはり故郷が好きで地元に戻ってきた。それ以来は農業においては初心者であるものの、積極的に地元の共同作業（草刈り、防火帯づくりを含む野焼き）などに関わってきて、そもそも馬と阿蘇の大自然が大好きな人である。郷土に対する気持ちはY君も同等くらいであるものの、彼は地元を離れないで自宅で飼育している馬を生業にしている。観光客が多い季節には阿蘇山頂上の草千里ヶ浜で馬に観光客を乗せて周囲を案内し、山を下りる季節になると家畜業の運搬を手伝ったりしている。

二人の場合、SDGsと照らし合わせると特に目標12である「持続可能な生産消費形態を確保する」（略して「つくる責任、つかう責任」）に匹敵する。特に、小目標12.8である「持続可能な開発および自然と調和したライフスタイルに関する情報と意識を持つようにする」及び、Y君の場合は小目標12.bの「持続可能な開発が雇用創出、地元の文化・製品の販促」を象徴するような生活を送っている。

## (2) 阿蘇地域におけるコロナ禍の影響

2020年は三月中旬頃からコロナ禍の影響が次第に阿蘇地域にも大きな変化をもたら



した。即ち、九州の代表的な観光地でもあるため、観光の産業体系に属するサービス業や観光向けの催し物をはじめ、集落内の日常生活や文化的な活動に於いても顕著であった。例えば、阿蘇地域の宿泊業を支えている下請け業者も打撃を受け、南阿蘇村吉田地区にある地元大手のクリーニング業者では洗濯の依頼が激減したため営業を毎週土曜日だけに制限した。主要道路沿いにある飲食業界もまた対応に追われていた他、地元にも於いても一斉に休業を押し切りたい業者と、対策をしっかりとって営業を続けたい業者の間に亀裂が通った。

観光業とは別に、一般住民の生活に於いても自粛の波が及んだ。コロナ禍が治まらない限りは行事を無期延期、或いは、中止にした。また、地元と観光の間に存在する前章で紹介した田実祭の一部である流鏝馬も例外ではなかった。阿蘇神社では3月18日の火振り神事の直後に全ての一般向け行事は中止となり、9月の田実祭も同じ結果となった。

しかし、表面的には中止となった行事は表面下で一部継続されていたのも事実である。流鏝馬はお披露目舞台は中止となったものの、神社の依頼で有志による練習は敷地内で行われていた。また、集落レベルに於いても著者が特に観察を続けている南阿蘇村のS地区では秋の村祭りは密を避けるため中止となったが、神事に限って別当世帯が極少人数で執行した。この様に、表向きには中止となった行事はそれなりにコロナ禍に対応した縮小形で継続されていたのである。（写真-4）

写真-4 コロナ禍の流鏝馬練習会



出典：2020年9月12日阿蘇市阿蘇神社裏敷地にて著者撮影

また、S集落の場合、夏の共同作業である一斉清掃日や小正月のドンドヤ（左義長）は外で行われることから安全とみなして執行したほか、地区の入会地における作業（野焼き等）も続いた。なお、一斉清掃のようにある程度の住民（各世帯一人出役）

が集合した際には、その日の式において区長が臨時のお知らせ会というかたちの簡易的な寄り合いも行う事が可能であった他、その機会に入会地の管理団体（牧野組合）も協で集まって意見や日程を調整するといった会合を開いた。（写真-5、6）

これらの非公式な集まりは地元の文化継承において強い絆が働いており、同時に、関わっているアクターが文化的継承の重要性を意識している実証であろう。

SDGsと関連付ける場合、特に目標11の「包摂的で安全かつ強靱で持続可能な都市及び人間居住を実現する」（略して「住み続けられるまちづくりを」）に当てはまり、特に小目標11.3の「摂的かつ持続可能な都市化を促進し、すべての国々の参加型、包摂的かつ持続可能な人間居住計画・管理の能力を強化」と11.4の「世界の文化遺産および自然遺産の保全・開発制限取り組みを強化する」と合致する。

写真-5 南阿蘇村S地区の一斉清掃後に行われた住民通知会



出典：2020年7月5日南阿蘇村S地区にて著者撮影

写真-6 南阿蘇村S地区のドンドヤで行われた牧野組合員の調整会



出典：2021年1月14日南阿蘇村S地区にて著者撮影

#### 4. 阿蘇地域におけるSDGsの構築における文化的要素の可能性

本文では阿蘇の文化が占める極一部を例にSDGsと照らし合わせてみたが、これらの性格は日常生活に組み込まれている年中行事の一環として選択したものである。上に示したとおりに、文化も持続性も多彩な定義が可能であり、それなりに占める領域は極めて大きい。また、文化と持続性が相互に影響を及ぼす関係であるため、定義的なアプローチを試みるよりも、文化が持続性に及ぼす影響に着目してみる。無論、村の一斉清掃が文化であると認識する地元住民は少ないであろう。しかし、述べた通りにそれは定義の問題に過ぎない。著者の解釈では「文化」と言う用語を広い意味で使い、共同作業も個人が描いた絵画も、観光向けのイベントも、範囲的に定められた領域の住民が生み出す全ての表現や慣習などを総括する。

地域社会における文化的要素は、自動車に例えれば、いわばエンジンの複雑な歯車を柔軟に効率よく同期させるオイルに当たる。この例えに沿って、文化には社会の仕組みを安定させるだけではなく、動力を発揮する源となる。その理由は、個々のアクターが文化的な活動に関わることで生まれる自己満足やプライドと言った内面的なものであると共に、特に共同慣行や行事においてはそれらの内面的なものを共有できる社会空間が提供されるからである。

写真-7 南阿蘇村S地区のお籠もり



出典：2021年1月14日南阿蘇村S地区にて著者撮影

著者は幸いにも前記のS地区においてそれを象徴するかの様な集まりを観察できる機会があった。それは、地元で若宮様と呼ばれている神社の建物で秋の台風が阿蘇にやってくる頃に行われているお籠もりである。その行事は別当役のS地区内に存在する三つの隣保班の中から毎年ローテーション式で担当する。行事では別当班の住民などを中心に一週間に渡って毎日神社の建物内に座り込み、それぞれが自前で持ってくる飲食料をいただきながら昔話や世間話で盛り上がる場となる。神社には簡易的な水



場と調理台があるものの、ラジオやテレビ、カラオケといった電気機器は存在せず、参加する住民が淡々と話しで盛り上がっている。これも産業的な例をとって、いわば社会資本を生み出す地元の工場に例えられる。（写真-7）

SDGsの具体的な目標には文化が挙げられていないものの、可能にする手段としては地元の文化的要素が貴重なツールであると考えられるだけでなく、著者は不可欠であると確信している。

## 参考文献

- 1) Oliver Parodi, Ignacio Ayestaran, und Gerhard Banse, eds.: *Sustainable Development: Relationships to Culture, Knowledge and Ethics* Karlsruhe: KIT Scientific Publishing, 2011.
- 2) Wiktor-Mach, Dobrosława: What role for culture in the age of sustainable development? UNESCO's advocacy in the 2030 Agenda negotiations, in *International Journal of Cultural Policy* 2018, pp. 312-27.
- 3) UCLG (United Cities and Local Governments) Committee of Culture, ed.: *Culture in the Sustainable Development Goals: A Guide for Local Action* Barcelona: [http://www.agenda21culture.net/sites/default/files/culturesdgs\\_web\\_en.pdf](http://www.agenda21culture.net/sites/default/files/culturesdgs_web_en.pdf), 2018.
- 4) British Council, ed.: *The Missing Pillar: Culture's Contribution to the Un Sustainable Development Goals* British Council Culture in the Sustainable Development Goals: A Guide for Local Action: [https://www.britishcouncil.org/sites/default/files/the\\_missing\\_pillar.pdf](https://www.britishcouncil.org/sites/default/files/the_missing_pillar.pdf), 2020.
- 5) Kopfmüller, Jürgen: From the Cultural Dimension of Sustainable Development to the Culture of Sustainable Development, in Oliver Parodi, Ignacio Ayestaran, and Gerhard Banse: *Sustainable Development: Relationships to Culture, Knowledge and Ethics*, Karlsruhe 2011, pp. 93-106.
- 6) Hauser, Robert and Gerhard Banse: Culture and Culturality: Approaching a Multi-faceted Concept, in Oliver Parodi, Ignacio Ayestaran, und Gerhard Banse: *Sustainable Development: Relationships to Culture, Knowledge and Ethics*, Karlsruhe 2011, pp. 33-51.

(2021. 2. 25 受付)

## CULTURE WITHIN SDGs: CASES IN ASO

Johannes WILHELM

Although culture is not explicitly mentioned in the United Nation's Goals for Sustainable Development (SDGs), it may play a vital role as a useful tool in implementing the latter. The paper provides some cases from the Aso region in Kumamoto, Japan, where individual lifestyles and local customs are in fact already realizing aspects of SDGs. The author strongly stresses the importance of local cultural practices for the most perfect and effective realization of these goals.